

さんしゃ Zapping

Vol. 33 No. 4 (通巻 192 号)

2019 年 3 月

＜産社学会 ニュースレター＞

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp

<http://www.ritsumei.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

〔 目 次 〕

＜ご退職挨拶＞

24 年間、ゼミで遊(まな)びました (産社のモットー「産社で遊(まな)ぶ・産社で学(あそ)ぶ」)	乾 亨	p. 2
「学雷鋒」(雷鋒さんに学ぼう)	文 楚雄	p. 3
「遠くて近きもの」－無事に定年退職－	津止 正敏	p. 4
「退職を迎えるにあたって」	仲間 裕子	p. 6
私とコリア	山下 高行	p. 7
二足の草鞋を履き続けて	山下 芳樹	p. 8

＜教育実践報告＞

International Teaching at Undergraduate Level	Monika STEFFEN	p. 11
---	----------------	-------

＜エッセイ＞

出版に伴うリスク、あるいは出版産業の影と光について	赤井 正二	p. 15
---------------------------	-------	-------

<ご退職挨拶>

24 年間、ゼミで遊びました(産社のモットー「産社で遊ぶ・産社で学ぶ」)

乾 亨

私の大学生生活は、ほぼゼミ活動とイコールです。といっても、犠牲的精神で学生のためにゼミ運営に身を捧げた、という意味ではありません。

京大時代からの恩師延藤先生のもとで「住み手のためのまちづくり」を志し、住み手が主人公となって住まいづくりを行うコーポラティブ住宅ユーコート(‘85 竣工・入居)に関わるなかでの私の立ち位置は、現実に進みつつある住民参加の取り組みの真っ只中であって、その進行を支援する「計画者(専門家)」でした。

その後、延藤さんのもとで熊大大学院で「研究」に取り組む際も、まちづくり事例を第三者的に参与観察し、そこから普遍的な「法則」を明らかにするという意味での、いわゆる「研究者」としてではなく、参加のまちづくりの支援者として、住民とともに、目の前の現実に関わりながら、そのなかで獲得した実感や知見を省察し概念化する(要するに、物語として語り伝える)「参加型研究者」でありたいと考えてきました。

ですから、立命館に赴任し大学の先生になってからも、まずは、自分自身が地域まちづくりに参加し、まちづくりを手伝いながら学びたいと考えましたし、その時、ゼミ生を引き連れて地域に入ることで、ゼミ生も理屈でなく実感のなかで学んで欲しいと考えました。それが、今に続く乾ゼミの基本です。ですから、「私の大学生生活≡まちづくりの現場≡ゼミ活動」というわけです。

ゼミ生たちにとって、地域に入り、地域の現実やまちづくりの取り組みを体感し、地域の皆さん

と接する中で学ぶことは、とても面白かつ意義深い学びの場であったことは確かです(その点について、地域の皆さんには言葉に表せないほど感謝しています)。

でも、じつはそのとき私は、学生のために地域とおつきあいしてきたわけではなく、私自身も、地域に参加する中で、地域のことやコミュニティのことを勉強させてもらっているわけです。そしてその際、ゼミ生が地域に入っていることで、私もずいぶんと助けられてきました(ゼミ生が地域にいて、地域と乾をつないでくれた)。そういう意味で、乾ゼミでのゼミ生と私はウィンウィンの関係なのだと考えています。だからこそ、ゼミで学生と一緒に走り回ることが面白かったし、続けられたし、学生も僕も多くのことを学べたのだと考えています。

<参考> 乾ゼミってこんなゼミ

＊ゼミガイダンス資料より抜粋

① 乾ゼミでなにをするのか

<目的一>「まちづくり」の現場に参加しながら、地域まちづくりとはなにか、地域コミュニティとはなにか、その可能性や課題、仕組みなどを実感を通して学ぶ＝地域コミュニティに飛び込み、体験し、まちの人たちと語り合い、教えてもらう。学んだことを整理してちょっとだけ理論化してみる。自分達の学んだこと・考えたことを地域に返す。可能ならちょっとだけ提案する。

<目的式> まちづくり応援隊(まち援隊)。乾ゼミ

はまちづくりに役に立ち、まちのひとに喜ばれながら学ばせてもらう、まちづくり NPO だ！

②乾ゼミの考え方

乾ゼミは、地域活動の支援を目的として活動する学生ボランティアではありません。地域に参加させていただき、いろいろな活動を地域みなさんと共にさせていただくなかで、地域コミュニティの力・地域コミュニティの仕組み・地域コミュニティのヒミツを実感として学ぶ(「知る」ではなく「わかる」)ことを目指しています。

ですから、乾ゼミと地域の関係は「支援する」で

はなく、「受け入れてもらい、学ばせてもらう」関係です。

とはいえ、学生の地域観察なんか住民にはただの迷惑ですし、学生だって、観察するだけより活動のお手伝いをして少しでも喜ばれる方が充実感があります。それに、地域の一員になったつもりで共に活動してはじめて、地域みなさんから信頼してもらい本音の話を伺うことができるし、愛着を持って地域のことを考えることができるようになるはずだし…そしてなにより、その方がオモロいし楽しいから。

「学雷鋒」(雷鋒さんに学ぼう)

文 楚雄

先日、ネットグループの友人から中国の歪んだ社会を風刺する笑い話が送られてきた。笑い話は下記のようにになっている。

小学校の先生が次のような昔の話をして生徒たちに質問をした。

40 年前、ある日、ある男が雨の中を歩いていた。男の前に女性がいた。その女性は傘を持っておらず、子供も抱いていた。男は女性に近づき、傘を貸してあげ、子供も抱いてあげた。

先生が生徒たちに質問をした。「男はなぜこのような行動をとったのですか」

班長の生徒が、真っ先に答えた。「男は誘拐犯だ。女性の子供を狙っているのだ。」

いつもいたずらをしている生徒が言った。「理由は明白だ。女性が美貌なので、男はその女性を狙っているのだ。」

学習委員が答えた。「男は商売人だ。傘を貸し、子供を抱くことにより、費用を取るのだ。」

最後にもう一人の生徒が答えた。「男は強盗犯だ。女性のカバンを狙っているのだ。」

先生は男のとった行動の理由を説明した。

「男は『学雷鋒』活動をしただけです。傘を貸したばかりでなく、その女性を家近くまで送ってあげました。」

生徒たちはわーと騒ぎだした。「こんなことがあるの？ 女性の旦那さんがこれを見たらどう思うだろう。……」

先生は言った。「40 年前、このような行動を取るのとは極普通です。当たり前です。」

上の笑い話が示しているように、ただ 40 年間だけで中国の社会はこのように変わってしまった。このように歪んでいた。ここまで腐っていたのだ。笑い話だが、とても笑うことができなかった。

「学雷鋒」活動はいったいどんな活動なのか、簡単に紹介しておく。

雷鋒さんは、1940 年生まれ、中国湖南省長沙

市の出身。1957 年には中国共産主義青年団に入り、1960 年に人民解放軍に入隊。1962 年 8 月、遼寧省撫順市で殉職、享年 22 歳。死因は電柱を立て直す作業の事故であった。

雷鋒さんの死後、彼の書いた日記が「発見」された。日記には、彼が行った多くのボランティア活動の記録が残っていた。例えば、中国東北部の撫順市が大洪水に見舞われて多くの人々が被害を受けた。そのニュースを聞いた雷鋒さんは、貯金していた 203 元のお金を被災地に寄付した。60 年代解放軍兵士の毎月の手当てはわずかしかなかったもので、200 元は彼にとっては大金であった。雷鋒さんはこの大金を被害者に寄付したのだ。

雷鋒さんの生前のボランティア活動は政府やマスコミに大きく取り上げられた。特に 1963 年 3 月 5 日に毛沢東は、「向雷鋒同志学習(雷鋒同志に学ぼう)」と呼びかけ、学ぶキャンペーンをスタートさせた。以来、雷鋒さんは模範兵士として、無私の象徴として偶像に祭り上げられ、今日に至っている。この活動は官製の政治的な側面が

あったが、子供の教育や倫理道德の形成には役に立ったのは間違いないと思う。

私が小学校の時は大いに「学雷鋒」活動を行っていた。生徒たちは放課後、一人暮らしの老人の家へ行って手伝いをしたり、公の場所を掃除したりしていた。これは半分、学校での報告のためであるが、ボランティア活動を行った事自体に喜びを感じていた。人を助ける精神も少しずつ身につけた。

ところが、80 年代から中国は産児制限政策を実行し、経済も計画経済から市場経済に切りかえた。中国は驚異的な経済成長が成し遂げられたが、拝金主義の風潮が蔓延っていた。「学雷鋒」ボランティア活動は行わなくなってしまった。80 年代以降に生まれ成長した人たちは、拝金主義、成果主義、個人主義に走り、ボランティア活動の精神が養われていないのである。このような背景があつて、上記のような笑い話が生まれた。

「遠くて近きもの」―無事に定年退職―

津止 正敏

今年度を持って、私の本学での生活が幕を閉じる。前職(社会福祉協議会)から大学に籍を移して 18 年間、多くの友人・知人・同僚のお世話になった。長いようだが、あつという間でもあつたように思う。

あるゼミ生から「先生は京都の父です」と言われて少し戸惑ったのは、赴任したての 10 数年前だったが、今年の 4 回生のやんちゃな子から卒業論文集に「先生は私のおじいちゃんです」と書かれて、今度はビックリした。父から祖父へとステージがグッとあがったのだが、私の孫はまだ 4 歳と 8 ヶ月なのに、22 歳からおじいちゃんとは。でも、外れてはいないだけに妙に得心した。中国から

の留学生(院生)は「一日為師 終身為父」という諺を教えてくれた。一日だけでも師に教わっていたことがあれば、一生で父親のように尊敬するということ、だという。「だから、先生は日本の父です」という。言われるほどのことは何もできていないのに、と恥ずかしくて何処かに身を隠したくなる。

無事に定年を迎える、ということもあってだろう。有難いことに年初から公私にわたっての記念イベントが続いている。去る 1 月 20 日には、私と縁を紡いできた高齢者事業を運営する社会福祉法人と学部との共催で退職記念講義(最終講義)が開かれ、3、4 回ゼミ生や卒業生、法人の関係者

が多数参加して賑わった。演題は法人からの依頼もあって「仕事と介護の両立」をテーマにしたものだったが、講義終了後には私には不釣り合いな幾つもの花束に包まれて恐縮した。

また2月23日には、退職祝賀会なるものが卒業生らによって企画された。私は当初、退職講義のあとに学食や末川記念会館のレストラン「カルム」でもいいじゃないか、と思わないでもなかったが、駅前の交通の利便性を優先する実行委員会の言うがまま従った。会には現役・OBのゼミ生だけでなく、かねてよりお付き合い頂いた男性介護者と支援者の全国ネットワーク(男性介護ネット)や RitsVC(立命館大学ボランティアコーディネーター養成講座 OB 会)の関係者、前職での同僚、私が10年来理事長を勤めている社会福祉法人の職員も出席した。

式では例にもれずに、あることないこと盛りに盛った話で、みんなの玩具にされるがまになった。祝賀会ってこれまでの失敗を暴かれることなんですね、とは出席したある友人の弁。ベトちゃん・ドクちゃんの支援活動でご縁を頂き、「臨床」という研究手法を学んだ藤本文朗先生(滋賀大学名誉教授)に乾杯の音頭をとって頂いた。式の数日前から「何を言えばいいんだ」との問い合わせ。「褒めてください」「そんなのがなければどうするんだ」「一つや二つ、何なりとあるでしょ」。本番では、奥様同伴で参加され、やはり褒めるところが見つからなかったらしく「学位論文でも書け」と檄を飛ばされ、最後はベトナム語の「ヨー(乾杯)」で終わった。

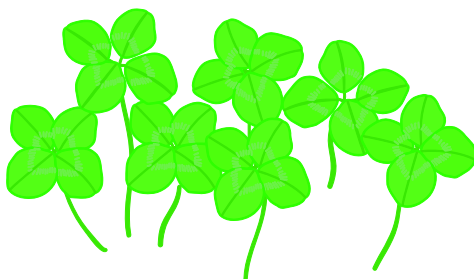
幼子を抱えての参加者や、同期生の写真とメッセージを綴ったアルバムを持参した卒業生グループもいた。後々のこともあるからと、みんなから提出して頂いたアドレス・カードには、懐かしい優しいメッセージも幾つか添えられていて嬉しかった。今も時折読み返しては、涙目になっている。九州から北海道まで、駆けつけてきてくれた卒業生や友人たちに感謝。そしてこの場を作ってくれ

た実行委員のメンバーに感謝。私も65歳、もう次のライフイベントは彼の岸でのことだけに、二度とないかもしれない至福の時を過ごした。

まだ記念の式が続く。祝賀会の3日後の26日には学部学会による退職者共同研究会があった。40代半ばまで過ごしてきた地域福祉の現場から大学に籍を移して戸惑ったことや、数日間学生と寝食を共にして実施してきた障害児の放課後調査や男性介護者へのインタビュー調査、ボランティアのチャレンジドケース研究、などこれまでの教育・研究を振り返る機会も頂いた。

さらに祝いの式は続く。私が事務局長を務めている男性介護ネットがこの3月でちょうど発足10周年を迎える(3月9日～10日)。10年にもなると介護が終わったとの報告や、家族からは会員自身の介護が必要となったとの連絡も届いて、寂しい思いもしてきた。10周年の記念式を目途に、いま記念誌の発行やイベントの企画、新役員体制の組織等々その準備に忙しくしているが、滞りなく祝いが終われば、今度は3月20日の卒業式だ。恩師の教えに感謝の意の謝恩会はまだ死語になって「卒業する私たちを祝ってよ」謝恩会に面食らったのも、もう懐かしい思い出になったが、今年も多分そんな声に出会うことになるに違いない。その後、長く過ごしてきた研究室を明け渡して、私の18年間の大学での生活を終えることになる。ただ、しばらくは特任として教壇に立つのだが、大学への関与はこれまでとは違って格段と希薄になると思うと、まだ道途上のプロジェクトも抱えているだけに少し不安にもなり、寂しくもある。

「遠くて近きもの 極楽。舟の道。人の仲」(枕草子)という。まだまだ先のことだと思っても意外に目の前にあるのが、彼岸への旅立ちや乗り物での行程、男女の仲、ということらしい。娘の結婚式の際にも似たような感傷に襲われ不覚にも涙を流したが、私の今年のイベントいずれもが「遠くて近きもの」―清少納言の言葉が身にしみる。



「退職を迎えるにあたって」

仲間 裕子

在職の 25 年間を振り返ると、様々な思い出が蘇ります。美術史・美学領域の教員の就任は、立命館大学全学では初めてだったようで、当初は以前の研心館の階段教室で文学部の学生たちにも教えていました。私の記憶では担当した「芸術表現論」は 700 名ぐらいの受講生だったと思います。当時はスライド・プロジェクターを使用した講義でしたが、日差しを避ける黒い厚手のカーテンがぼろぼろで機能を果たせなかったこと、上階で心理学の実験で飼われていた鳩が突然教室に舞い込んでくるなど、いろいろハプニングがありましたが、学生が突然手をあげて「先生、美とはいったいなにですか？」と尋ねたことが忘れられません。本質的で難解な、しかし素晴らしい問いでした。

現代社会学科人間・文化コースの教員として着任しましたが、当初は社会学系の学部でどのように芸術を教えていくことができるか、といろいろ試行錯誤を重ねました。卒業した津田塾大学国際関係学専攻で、社会参加した文学について研究したこと、専門のドイツ美術はそもそも社会的視点が重要であること、またとくにメディア、ジェンダーなどを専門とされる同僚の方々と知り合いになり、研究会等に出席させていただくことで、教育だけでなく、私自身の美術研究にも貴重な拡がりを得ました。

役職は当初から国際的な領域を担当しました。就任した数年後に南カリフォルニア大学との協定締結のために、産社や法学部の先生方と渡米。その後も国際インスティテュートが設立された際には全学委員の一人となり、学生の海外研修先も模索しました。フィリピンに調査に出掛け、WWF でジュゴンの保護を行う大学生の国際プログラムなどを提案しましたが、結局当地の政治不安定のため、断念しました。副研究科長を務めたおりに、山下高行先生にご尽力いただいた GP がスタートした時期で、筒井先生とホザック

先生と共にランカスター大学を訪問し、修士号の共同学位締結の交渉をしたこともありました。

研究に関しては、科研などの外部資金だけでなく、全学・学部の研究助成、また学外研究制度のお蔭で、おもに海外で研究活動を展開する機会を得ました。2009～2010 年ドイツ、エアランゲン＝ニュルンベルク大学への学外研究中には、日本で出版したドイツ・ロマン主義美術に関する著書の独語訳に従事し、フィヒテ、クライスト、フンボルト等の出版を機に 1845 年に創立された、ベルリンの Reimer Verlag から Caspar David Friedrich und die Romantische Tradition を出版する幸運に恵まれました。これも、独語訳を共同で行ってくれた亡夫、最終的に内容とドイツ語を確認してくれた当大学美術史研究所教授の Hans Dickel 氏の苦勞なしでは考えられません。予想もしなかったのですが、この本に対してドイツ美術史学会関連紀要やソルボンヌ大学のオンラインジャーナルなどで多数の書評が出まして、ドイツ・ロマン主義のメッカといわれる Alfried Krupp 高等研究院で出版記念講演の招聘を得ました。

また国際学会で定期的に発表することで、海外の研究プロジェクトに参加する機会が増えました。2016 年度に社会学研究科の客員教授として立命館大学に来ていただいた、Jos de Mul 先生は、国際美学学会会長をされていたので、以前から研究交流があり、先生が所属されているエラスムス大学で、ロマン主義の崇高論について講演した経験があります。また、ゲティ財団の Art in Translation プログラムの諮問委員を務めていますが、その代表者は国際美術史学会で知己のあった、エディンバラ大学名誉教授の Iain Whyte 先生で、前記の Mul 先生同様、現在も国際言語文化研究所重点研究プロジェクト「風景・空間の表象」(代表: 仲間)でも研究協力をいただいています。また 2015 年度のボローニャ大学への半年の学外研究がきっかけとなり、パリ・ボロ

ーニャ大学の研究者を中心にした美術館学研究グループに誘っていただき、このプロジェクト編 Period Room という本に寄稿しました。今後は、イタリアで新しく登場する芸術批評誌 Kritikè - Rivista di letteratura artistica e metodologia の編集委員も務めることになります。

また、アジア藝術学会が立命館大学で 2004 年に設立された縁で、アジアの研究者とも交流することになり、台湾や中国でプライベートでも親友と呼べる研究仲間を得ました。北京師範大学での講演や講義に加えて、台北の故宫博物院、台南市美術館、香港市立美術館などの美術館からもお声をかけていただき、ネットワークを拡げてきました。アジア藝術学会紀要 Journal of Asian Arts and Aesthetics の編集担当を長年続けていまして、現在は副会長として学会を支える立場にいます。海外の友人に‘world trotter’と揶揄されていますが、このように活動できましたのも、上記のように大学から与えていただいた研究制度によるものです。

教育に関しては、若い学生の芸術観が大きな刺激になりました。学生たちとのこの 25 年間は心配事を含めていろいろありましたが、都合のよいことに？楽しい思い出しか残っていません。学内の授業だけでなく、直島や東京などの国内、そして台湾、上海の美術展を見学し、意見を交換することも重要でした。忘れられない思い出のひとつを最後にご紹介したいと思います。学外研究に出発する前に歓送会をゼミの学生たちが開いてくれたのですが、その際、プレゼントをもらいました。骸骨のフィギュアがぶらさがったクリスマスツリー用オーナメントでしたので驚きましたが、手紙が付いていまして「先生を骨まで愛しています。ドイツ人にいじめられたら！？これを見て僕たちを思い出してください」と書かれていました。このユーモアと優しさ、産業社会学部学生ならではのと思います。教職員の方々に長年の温かいご支援に心からの感謝を述べたいと思います。



私とコリア

山下 高行

先日行わせていただいた最終講義で、時間の都合上触れることができなかったテーマが一つある。それは私とコリアとの関係である。折角の機会であるからそれについてここで触れたい。

私の祖父が日帝時代、インチョンで小学校の教師をしていた関係で父もまたソウルで中学時代まで学んでいた。子供の頃からコリアンの風物詩を聞かされていた私にとって、韓国は「近くて遠い国」ではなかった。しかしその後の日韓関係

は私にとっても韓国を「近くて遠い国」にしてしまっていた。それが崩れていったのは、96 年に韓国のトップ研究者だったイムボンジャン先生を国際学会に来ていただくため、ソウル大を訪れたときである。このときは筑波大の菊先生とともに韓国での学会で「特別講演」も行ったが、論文の中にほんの少し入れた韓国語に拍手喝采していただき、その後の温かいもてなしとともに、私の心の中では韓国に受け入れてもらえたと言う気持

ちが広がっていった。私はこのとき組合で当時平和担当の執行委員をしていたので、酒の席でも毎夜日帝時代の問題と日韓関係について、相互に外交的ではない、結構厳しい議論をおこなった。最初にあった何かよそよそしい雰囲気があるときいっぺんに崩れ、いきなり抱擁され、このとき以来私の中で韓国は永遠の親友(チング)となっていくた。それはいまの韓国中央大学との極めて深い交友でも同じである。いやそれ以上か。

もう一つ書いておかなければならないのは、コリア研究センターのことである。心から敬愛する徐勝「先輩」のもとで、一時研究センターが行っていたコリアンフィルムフェスティバルに関わることとなった。中央大学の申先生も聞いてびっくりしていた韓国トップの映画俳優を毎年お呼びし、主演作の映画を上映するのだが、その後毎回酒席をご一緒させていただくことが楽しみでもあった。”俺はアンソンギと飲んだんだぞ”と言ってもなかなか韓国の人は信じない。そんな方々と飲む中で、最も心に響いたのは、カンヌ映画祭で主演作のオールドボーイがグランプリを獲得したチェミンシクさんであった(かもがわブックレットで私との対談を出しています)。何せ二回も飲んだ

が、私がチェジウさんが大好きだというと、ストレートにむきになって”何でだ”と詰め寄られた(私も負けませんでした！)。本当に熱血漢で心に素直に入ってくる人であった。韓国映画の最高傑作の一つは、韓国の黒沢と称されるイムグオンテク監督の『風の丘を越えて／西便制』と思うが、実はチェミンシクさんの作品の中では小品かもしれないが、彼の『春が来れば』も”おっさん”には本当に胸にしみる作品だと思う。

さてチェジウさんのことが出たので最後に嘘みたいな話を一つ。実はチェジウさんは立命に来ることになっていたのである。日韓大使も務めており、私たちのオファーに対してノーギャラでしてくれることになっていた。しかしなんとということか、今でこそ時効で言えるが、この全く同じ時に金大中元大統領が、お忍びで徐勝さんに敬意を表して立命館を訪ねてこられることになったのである。セキュリティ上、泣く泣くチェジウさんの方は中止せざるを得なかった。香港までおわびの電話をしたときは本当に無念であった。しかしそのかわり、たくさんのSPに囲まれたなかで、握手で握ったノーベル平和賞受賞者の大統領の手はとても温かかったのを覚えている。

二足の草鞋を履き続けて

山下 芳樹

27歳で教職に就き、以来38年、二足の草鞋をはき続けてきた過去をこの場を借りて振り返りたい。

1. 実践と理論の往還：理論へのあこがれ(高等学校教諭時代)

物理を担当する教員として昭和55年に滋賀県立高島高校に奉職した。その後、滋賀県立草津高校、そして膳所高校に勤務することになる。この間の研究テーマは専ら原子核反理論、特に原子核の衝突の際、核子移行に伴う直接過程と交換過程を複合核形成をも視野に入れた、より詳細な近似である歪曲波ボルン近似(DWBA)で

扱うことであった。理論をプログラム化し、実験結果との照合に没頭した。

高等学校の現場では教員として、研究の面では膨大なデータを前にし、まさにニュートンの言う「真理という大海を前にして、浜辺で一つ、二つ貝と戯れる」日々が、約10年間続いた。

当時は、現職のまま大学に戻り研鑽に努めるという機会はなく、授業の合間の10分、深夜、そして土日が唯一の研究の時間であり、だからこそ後述する科学クラブの指導にもより真摯な姿勢で臨めたのだと思う。まさに教員として、先達から教えを請う学生として二足の草鞋をはき続けるという生活であった。

10 年目ようやくプログラムが走るようになり、結果が出はじめた。米国物理学会に投稿した論文の要約である。

本研究は、理科教育の背景となる最先端研究と位置づけることができる。入射エネルギーとして 45、50MeV の陽子を用いて反応を 1 段階相互作用をすべて含む多重モード有限範囲歪曲波ボルン近似 (FR-DWBA) で解析した。分光学的振幅はクラスター結合核モデルを用い理論的に求めた。実験結果の再現性はよく、数十 MeV という比較的高いエネルギー領域ではあるが解析の理論的根拠である FR-DWBA の有効性を示した。

約 30 のパラメータ、そして 6 重積分を数値的に扱うことは至難の業であり、その間、ガウス積分展開法やモンテカルロ法など、様々な手法を導入しては核心に迫っていった(この下積みの様子は、上の要約には現れていない)。これらの成果をもって、現職教員のまま博士後期課程に入学し 1 年後に博士学位を取得した。阪神・淡路大震災の年である。

この二足の草鞋生活で最も印象に残るのは、滋賀県立膳所高等学校物理地学班(科学クラブ)での生徒とともに過ごした研究三昧の日々である。その成果は、日本学生科学賞にて内閣総理大臣賞(平成 6 年)、文部大臣奨励賞(平成 7 年)、学校賞 1 位(平成 8 年)・・・と続いた。以下は、水柱というテーマ(右写真)で研究を行った際の生徒の感想である。

研究テーマは日常的な現象から探すことになっている。これは簡単そうに見えてなかなか難しい。テーマとは現象が大きく、派手なものという勝手な先入観があった。(中略) 1 つの発見に喜び、何度失敗しても挑戦していく。自分たちの手で隠されたメカニズムを少しずつ解き明かして論文に育て上げる。(中略) 発見という喜びと達成した喜びという 2 つの喜びを学んだ。

探究活動が、理科教育でもてはやされている昨今、児童・生徒の探究的活動に惹かれていった契機がこの物理地学班での泥まみれの活動にあった。

2. 理論と実践の往還：実践へのあこがれ(高校から大学へ)

児童・生徒の探究的活動を引き出すものは教材か、それとも・・・物理地学班での成果はあるものの、その要因が釈然としないもどかしさを持ちながら、平成 10 年に弘前大学教育学部に助教授として採用された。核反応の、より低エネルギー領域での理論の適用というテーマを持ちつつも、探究的活動を引き出す要因をえぐり出すという泥沼にはまって行った。この要因は、児童期に体験する「原体験」にあるのではないか。安直な理屈に左右されない「理屈抜きの原体験」だからこそ、その後の学びに実体験として働くのではないか、その後の広島大学大学院教育学研究科での実践、そして立命館大学での活動のすべては、このことに費やされていたのだと、今、振り返ってみてそう思う。

リカリッチ、理科の素材で構成したピタゴラスイッチのことだが、この 7 年間、立命館小学校や子ども社会専攻と連携関係にある児童を対象に実施した。この事業は、立命館大学に着任した年、和歌山大学附属小学校との共同企画として行った「泥団子バトル」にはじまる。児童(1 年生)が市内各所から集めてきて作った「秘密の泥(団子)」と子ども社会専攻生が作った「博士の泥(団子)」との優秀さを競うという企画であり、児童にとっても、教職をめざす学生にとっても大変に有意義なものであった。



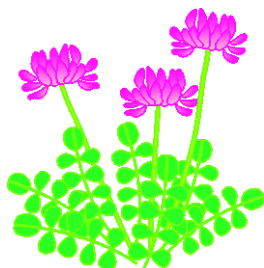
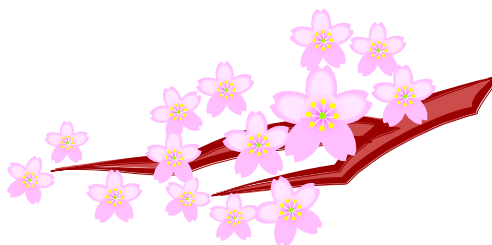
「日々の理科の授業に生かせないか」、「中・高学年にとっても魅力のある企画にできないか」・・・セミナーハウス等での活発な議論が引き金になりリカリッチがスタートした。立命館大学での12年間は、リカリッチとともに歩んできたといってもよいかも知れない。

3. 二足の草鞋をはき続けて（立命館大学への感謝）

自由と清新、変革をよしとする気風に守られながら、無事、定年を迎えようとしている。実に爽やかな気持ちである。二足の草鞋を履きつつ、高等学校在職時には、その旧態然とした体制に棹さしては押し流されまいとして必死に理論にしがみついた。大学に籍を得てからは、逆に学という鑑のつかない理科を実践した。右の写真は開発した教材を用いての小学校での授業風景である。



依然として二足の草鞋を履いたままではあるが、今後は、今しばらく立命館大学に籍を置きながら、起承転結の「結」の部分に少しシフトしていきたいと思う。



<教育実践報告>

International Teaching at Undergraduate Level

Monika STEFFEN¹

During my present invitation to Ritsumeikan University I provided three courses, two at the Graduate School: “Social Policy in Europe: The Welfare State, Society, and the Family”, and “Aging Societies, Generational Transition, and Public Policy”; and a third course, on « Health and Long Term Care Systems in a Global Perspective », for undergraduates with open enrolment for students from other departments, and international students. According to Prof. Matsuda, invited professors rarely teach international courses for undergraduates, I would therefore like to share the experience, which was a most positive one.

The number of students, not quite ten, allowed active participation, and close personal attention to each of them. 60 % of the students were Japanese and 40 % foreigners from Canada, Australia, and China. Their majors included sociology, anthropology, psychology, social sciences, English literature, and Japanese language for one of the foreign students. Most students were in their senior year, but there were juniors and also one sophomore. None had previous knowledge on healthcare systems and policies. The level of English varied from native speakers to various lower levels among the Japanese students. Several of the latter evaluated their English level as “3 or less” on a scale of five, and one as “low”. The course thus presented a multifold challenge for me as teacher, having to manage unequal communication capacities, differences in university

¹ CNRS Research Professor emeritus. University Grenoble-Alpes, CNRS, Sciences-Po Grenoble, Pacte, France (CNRS : The French National Centre for Scientific Research. School of Political Studies. Pacte: Social Sciences Research Laboratory).
Contact:monika.steffen@sciencespo-grenoble.fr

education, and the diversity of national and cultural conceptions concerning health issues, where ethics and values play an important role.

The language issue imposed itself immediately, with need for immediate solution. At the end of the first class, one of the Japanese student, accompanied by a classmate, came up to me in great despair, streams of tears running down the face, stammering: "I cannot understand, nothing, but I want *this* course. I do not know what to do". I asked two questions: "*How much* did you understand? And why do you want *this* course?". After struggling with stress and searching for words, the student finally stated: "Only 20 %. But I want to work in a municipal office in charge of health, I want this course". I ensured that "20 % was quite enough for a start", and that "given the professional motivation, language progress would be quick", adding that I had "no doubt about it". I offered to stay after each class to re-explain what might not have been understood, and "ordered" the student to listen every day to English news in internet "15 minutes daily, to train the ears". We immediately stayed for an after-class session, approximately 20 minutes, joined by several other Japanese students. In fact, the desperate student only needed three after-class sessions before declaring: "Now it's 80 %!". When the first group work was due for presentation, it was this student who did the oral presentation for the entire group, with great application and visibly proud.

To meet the challenges mentioned above, I adapted teaching style and methods, without lowering neither the content and nor the ambition of what I wanted them to learn. I used active participation as main tool for fostering successful learning in this mixed class. Three recipes proved helped in achieving the academic target:

First, careful time allocation. The native speakers were naturally quick to ask or answer questions, whilst the Japanese students remained reserved and shy. I paid careful attention to protecting the time Japanese students needed to speak up. The richness of their thoughts and relevance of their arguments thus came out, and consequently fuelled intense collaboration between the Japanese and the foreign students. The "time for patience" paid out in terms of increased class dynamics, with international comparison developing naturally. My hypothesis is that the quick English progress with increasing self-confidence on the Japanese side was essentially due to the vivid *peer*

exchange between students, which made English communication natural to the Japanese students.

Second, teaching approach. I opted for an inductive and analytical approach, where concepts and theory would follow empirical description and analysis, instead of preceding it as abstract framing, which seemed to fit best to the diversity of the class. Every new section of the course started with questions handed out to the students, generally as short written homework; the answers were analyzed and discussed during 5 – 10 minutes in the following class, before my formal teaching on the given subject. The aim was intellectual and practical: making the students think by themselves before a new forthcoming subject on the one hand, and starting classes with feedback and discussion on the other hand, in order to “open ears and mouths” of hesitant English speakers. After such preparation, I would then present and analyze the subject, and finally introduce the relevant concepts and theoretical elements that best framed the given issues. Theory was drawn from three bodies of literature: comparative health policy, social security and welfare state studies, and public policy studies.

Third readings. Compulsory readings were limited (two chapters compulsory, a third recommended), completed by weekly short readings, often newspaper particles in support of forthcoming topics. “Heavy” readings were suggested on each major topic of the course, so that students could go deeper into selected topics according to their specific academic or professional interest.

The course aimed at learning about health and long-term care systems and policies, but also at developing independent thinking, and operational skills like organized teamwork, public speaking, and research strategies. To meet such aims, I organized three types of presentations (which totalized 50 % of the marks; the other 50 % were based on an individual final examination paper):

- “Short” presentations, on the basis of “four minutes” presentations on a specific policy problem, coupled with simulation for decision-making (“The Health Minister’s weakly executive meeting: What actions do we need to take?”).
- Classical presentations (15 minutes + 15 min. discussion) on the health or LTC systems in the students’ own countries, followed by comparative assessment.

- Research conducted in internationally mixed teams: the class was divided into two groups working each a comparative cross-country topic: “Organ Transplantation”, and “Mental Health Care”, both including an analysis of the ethical issues, legal situations, care organizations, funding mechanisms, identification of shortcomings, and policy recommendations. Each topic included the production of a comparative table on Japan, China, Canada and Australia.

General lessons may be drawn from this present experience of international teaching at undergraduate level.

1) The teaching approach fostering systematic active participation leads to positive class dynamics resulting in effective learning, on the course subject (the students delivered excellent work), English communication, and team working. *Such mixed-nationality class is surely a most effective way for making English “natural” to Japanese students, because of subject interest (chosen courses) and PEER COMMUNICATION.*

2) Japanese students know far more English than they actually use. Hearing seems to be more difficult than speaking (English is a language of mostly high-frequency sounds, whilst low frequency prevails in Japanese, therefore the “hearing” difficulty, and subsequently speaking hesitation). One student stated it clearly in the initial self-assessment: *“Reading and speaking fluent, listening only 2”* on a scale of 5. To help them overcome hesitation for public English speaking, it is important that the teacher *creates a “secure” environment in the classroom, and controls his/her own speaking: slow, clear, without accent, and repeating without making students feel uneasy.*

3) Applying such approaches was easy and optimal in a rather small class of less than ten students. However, it can be used to classes of 15 or 20 students, and even above if the level of English is good enough: *The higher the number of students, the more the English level needs to be high, and homogeneous between the students.*

Teaching this undergraduate class was an interesting experience for myself, and a happy one. Students worked a lot, with enthusiasm and discipline. They

seemed to have appreciated the course, and expressed their gratitude. Those who are staying at Ritsumeikan next year asked “what course I would teach them for next term, to enroll again”. In general terms, this expresses *a clear demand for international teaching at undergraduate level. It should therefore be encouraged and developed.*

I would like to deeply thank the College of Social Sciences, especially the Dean, Professor Takeuchi and his board, as well as Ritsumeikan University for their invitation. I sincerely thank Professor Matsuda, for being a most attentive host professor, for all he has done, and keeps doing to make my stay comfortable and academically fruitful, and for having associated me to the research and book project led in collaboration with Professor Shizume and Professor Kato, to whom I am also grateful. Last but not least, my thanks go to the administrative staff, for dealing kindly and efficiently with the many practical problems of an invitation. To all, my warm and respectful “Thank You”.

<エッセイ>

出版に伴うリスク、あるいは出版産業の影と光について

立命館大学名誉教授 赤井 正二

2016 年度本学会より多額の助成をいただき『産社論集』で発表してきた論文をベースにして『旅行のモダニズム』をナカニシヤ出版より刊行した。最近この本の内容に関して大事なやり取りがあったので、助成をいただいたものの責任の一環として、その大筋だけを本会の皆さんにお知らせすることとした。合わせて、著作物にかかわる法的権利と研究倫理との違い、出版に伴うリスク、出版産業の影の部分、そして出版の良心を支える編集者の姿勢、こうしたことについて考える一つの事例としていただければ幸いです。

昨年末、某出版社の出版物の一部が私の著書の一部（初出は『産業社会論集』に発表した論文）と幾つもの点で類似していることを見出した。英文書籍タイトルの翻訳、節のタイトル、表の作り方と内容、分析の視点・方法とその説明の仕方、注目すべき論点、英書からの翻訳箇所と訳文などである。それにもかかわらずこの書籍には私の論文や著書についての言及がどこにも見当たらない。このようなことは以前にもあったが、今回はあまりにも類似点が多かった。

私はこの出版物のオリジナリティについての疑義を文書に整理しつつ、ナカニシヤ出版の編集の方に連絡したところ、「これは黙ってはいけないケース」と即座に共鳴していただいた。さらに、私だけのアクションでは無視される可能性もあるとして、私が作成した疑義照会文書にナカニシヤ出版からの文書もつけて某出版社に送っていただいた。

後日、某出版社の権利関係を扱う部署の長からの文書と著者から私への手紙を受け取った。前者は類似点は認めつつ「アイデアは著作権の保護対象ではない」などと身構えた調子の文面だったが、「先行研究への敬意」の点で問題があることを認めて一定の対応を約束するものであった。著者からの手紙は、残念ながら資料入手方法についての疑義などを払拭するには至らないが、問題を認め対応を約束するものだった。両者ともいわば、法的な権利侵害は認めないが倫理上の問題は認めると云う立場だった。

某出版社が約束した対応は十分なものには至っていないが、ナカニシヤ出版編集部は二度三度電話で追加的措置について交渉することまでして下さった。現状は約束の実行を注視している段階である。

もしナカニシヤ出版編集部の共鳴と努力がなければ、結局は何らの対応もなされず、私は疑念をかかえ残念な気持ちを持ち続けることになったかもしれない。あるいは「黙る」ことに積極的な価値を見出す努力をしたかもしれない。世の中にはこのような気持ちを抱えている研究者も多数いるのかもしれない。

出版が大きな産業となり知の普及が大きく前進した反面、このような不透明な影の部分も拡大せざるを得なかったのかもしれない。そのような影の中で、「黙ってはいけない」と一緒に声を上げていただいたナカニシヤ出版編集部の方々に出版文化の良心の光を見た思いがした次第です。

このことからどのような教訓を引き出すかはお任せするが、私自身としては少なくとも黙認しなくて良かったと思っている。

Zapping 原稿募集

